

コミュニケーションはカタチから

酒井 利美

Written by Toshimi Sakai

住まいの三重苦

もともとの私たちの住まいには、中古住宅で築三〇年を超える、道路側にやや傾いている、すきま風が入るといって「暗い」「狭い」「寒い」の三つの問題がありました。

そこで、二人の娘たちのためにも、どうしても快適な住まいにしたかったので、ついにリフォームすることにしましたのです。

私たちは、夫婦ともに一級建築士、そしてキッチンスペシャリストという資格を持ち建築活動に取り組んでいます。

一番心がけたのは、「子供たちとのコミュニケーションを確保する」ということでした。そして、暖かで快適な住まいを手に入れるためにリフォームに踏み切ったのです。

子供たちの背中しか見えない!?

従来のキッチンのカタチ

一般的なLDK(リビングダイニング・キッチン)と言われるスタイルであれば、たとえキッチンが対面型であったとしても、子供たちの背中しか見ることができません。

たとえばリビングでテレビを見ている時に、対

面型キッチンで食事を作りながら、子供たちの顔を見ようとしても、背中しか見ることができない位置関係になってしまいます。対面型でも、お互いの距離が遠く感じられてしまうのです。「これでは、子供たちとのコミュニケーションが取れないので、リフォームしても意味がありません。」

いつまでも、子供の背中を見続けているわけにはいかないのです。

私は、子供たちがテレビを見たり、遊んだりしている状況を見ながら、そして、いつでも気軽に会話ができる空間づくりを一番に優先させることにしました。

家づくりはキッチンから

現在の私たちの住まいでは、キッチン・ダイニング・リビングの関係が一般的な配置とは違っています。

通常なら、LDKという部屋があれば、間仕切りなどのない一つの空間になりますが、私たちの住まいは違っています。

「考え方」を根本的に変えてみました。

とくに、キッチンスペシャリストという資格を持つこともあって、キッチンづくりには、もともとこだわりがありました。

その家の中のキッチンの位置付けを変え、家づくりはキッチンを中心に考えることから始めることにしましたのです。

「コミュニケーション」を確保する 三つの空間

一般的にLDKと言えば、キッチンとダイニングの関係は深いものです。

「キッチン」↕「ダイニング」

キッチンで食事を作り、ダイニングで食べる、という生活の流れがあります。

そして、ダイニングとリビングの関係も深いものです。

「ダイニング」↕「リビング」

私たちの住まいはこの三つの空間であるLDKの基本的な関係性を変えたのです。

「なぜ変えたのか？」そして、「どのように変えたのか？」

それは言うまでもなく、私たちの住まいでは子供たちの「コミュニケーション」を密接に取るようにしたからだから他なりません。

私たちは共働きのため、子供たちと接する時間が限られています。短い時間でもしっかりとした「コミュニケーション」が取れるようにすることが大きな目的でした。

一級建築士である私の妻は、二児の母でもあります。わが家のリビングでは子供が小さいので、リビングは子供の遊び場になっています。

食事を作るのも母親の役目ですが、キッチンに立ちながら、食事を作ったり、後片付けをしたりする時にも、子供たちと接することが出来る空間にすることが、私たちにとって欠かせない

とできないことだったので。

キッチンの配置と家族団らんの場であるリビングやダイニングとの関係は「コミュニケーションを育むために、家づくりでは最も重視しなければならない」ということになっています。

キッチンとリビングの深い関係

住まいは、キッチンの位置関係によって使い方や家族との「コミュニケーション」の取り方が簡単に変わってしまいます。

ですから、私たちがキッチンをつくる場合には、位置関係の基本をおさえます。それは、「キッチンを中心に考える」ことです。

ただ、LDKになっていると、対面型キッチンにすれば良いというだけでは使いやすく「コミュニケーション」が取りやすいカタチとは言えません。

このキッチンを中心にして、「キッチンからへ」という人の動き(動線)を考えた配置がポイントになるのです。

最適なキッチンの位置関係とは、住まいの中心にキッチンを設置することで解決します。

たとえば、

「キッチンとダイニングの関係」

「キッチンとリビングの関係」

「キッチンと洗面脱衣室の関係」など、

住まいの主要な部屋への移動が楽にできるように配慮することで、快適な住まいが手に入ります。

そして、最も大切な「キッチン」との位置関係で一番近くに来るのは、「リビング」です。

今までなら、キッチンとダイニングとは深い関係で近くにありました。

食事を作ったキッチンへ、食べるダイニング(というスタイルです。食べてから、リビングで寛ぐという流れでした。

しかし、これからは、キッチンとリビングの関係を深めた位置関係に注目すべきです。

たとえば、リビングにキッチンからダイレクトにアクセスできて、位置を近くすることで、リビングとキッチンの関係が強くなります。

すると、この三つの部屋(LDK)の使い方が変わってくるのです。

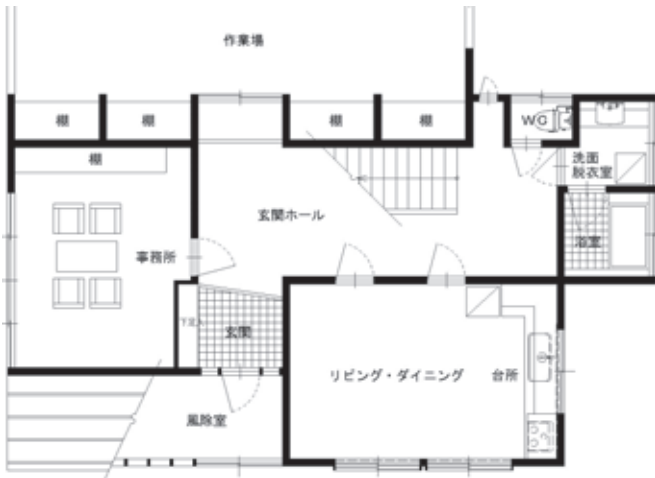
通常ならダイニングを介してリビングへと流れていましたが、それがなくなるのです。

キッチンで作業をしながら、リビングで子供たちと「コミュニケーション」が取れるようになるのです。つまり、ただ単にキッチンとリビングをつなげるといふシンプルな発想から、私たちの住まいづくりはスタートしたのです。

私たちの住まいをご紹介します！

リフォーム前

以前の間取りでは、一階部分に二畳のLDKがあり、そこで多くの時間を過ごしました。



リフォーム前



リフォーム後

キッチンが対面型ではなく、狭い空間の中に押し込まれている状況でした。廊下や階段が大きな割合を占めていたため、無駄な空間がありました。

リフォーム後

リフォーム後のLDKは、発想を変え、キッチンを中心に配置することにしました。以前は廊下であった場所にキッチンを配置して、その前にリビングが来るようにセッティングしました。

新しいキッチンのカタチを提案！

これからのキッチンのカタチ

キッチンもリビング・ダイニングのどちらからもアクセスしやすい環境に変えることで、キッチンに立ちながらも子供たちとの時間を共有することができるようになったのです。少ない時間でもコミュニケーションを多く確保

するためには、キッチンの位置を基準にしたカタチから、子供たちとの距離を縮めることで、背を向けていた子供たちと積極的に向き合うことができるようになるのです。

子供たちはいつもリビングで遊んでいるので、キッチンとリビングの位置関係が、とても重要なことだと実感することができました。

住まいは、まずカタチを決めてから生活環境を見直すというシンプルな方法で、良好なコミュニケーションを保てるようになるのです。

リビングとの位置関係を見直すことで、新しいキッチンのカタチが決まり、自然と子供たちとのコミュニケーションが生まれて来るのです。

□ 酒井 利美(さかい・としみ)

S. A. 建築デザイン一級建築士事務所代表、一級建築士、尚志高校インテリアデザイン系列講師、キッチンスペシャリストほか。一九七二年福島県生まれ。日本大学建築学科卒。父が大工の棟梁であり、小さいころから家づくりを見てきたことから建築家を目指す。福島県で公共建築を手がける老舗の設計事務所に勤務後、九九年に独立。キッチンを中心とした家づくりにこだわる。